

(三) 雲隠くもかくれ

浄御原宮大王の死から瞬く間に一月がたった。その日は早朝からみぞれ混じりの冷たい雨が降っていた。兵士が都中を走り回り、名ある官人達が次々と刑官うたえのかきに引かれて行った。その数は三十人を超えたらうか。

「どうしたのだ。」

「大王が亡くなられてまだ一月だというのに。」

「物騒なことだ。」

「大津皇子が謀反を企てたのだそうだ。」

声を落として話す背の高い筋肉質の若者。頬の傷跡すじが凄みおを佩おびているが、その引き締まった肌の色艶からすると、案外十台も半ばの少年かもしれない。

「まさか。大津皇子様がそんなことをなさるはずがない。」

「しつ。役人が来る。やつらに聞かれると面倒だぞ。」

人々は眉をひそめて囁ささやき合った。

他田おまたの大津の宮を囲んだのは物部麻呂の兵である。

「皇子様のご謀反を密告する者がおります。お心当たりはおありでしょうか。」

「知らぬ。一体誰が言っているのか。」

麻呂は無遠慮に大津の眼を覗のぞき込む。だが言葉だけはあくまでも慇懃いんぎんである。

「川島皇子様でございます。」

大津は平然として顔色も変えない。その堂々とした姿に麻呂は亡き大王を見る思いがしてたじろいだ。

「川島が何を言ったのかは知らぬ。俺は何も知らぬ。」

大津の父は浄御原宮大王、母は近江宮大王の娘太田皇女おおた。太田は菟野の同腹の姉である。母が生きていれば、大津が日継になっていたかもしれない。相前後して生まれた草壁と大津は幼い頃からライバルだった。

菟野の一粒種の草壁は、色白で神経の細やかな優しい青年である。菟野は幼時から当代一流の学者を集めて草壁の教育にあたらせた。おかげで少年期に花開いたその能力は、大いに菟野を喜ばせた。偉大なる父母の血を受け継いで、草壁自身自分の才能を信じて疑うことはなかった。だが、余りにも早

く伸ばしきった能力は、青年期にはもうそのしなやかな力を失っていた。自分の能力に疑いを抱いた時、草壁の屈折した神経は菟野の過大な期待に負担を感じるようになっていた。

その点早くに母を失った大津は、母に束縛されることなく自由奔放に育った。幼少の頃から学問を好み、その博学と文才は高く評価されたし、長じては武術にも励み、その逞たくましい体から振り下ろされる太刀を受け止められる者は少なかった。その天性のおおらかさから、衆望は大津に集まっていたのである。

宮を囲まれたまま何の弁明の機会も与えられず、大津は翌日には死を賜った。

「俺は死なぬ。死なねばならぬようなことはしておらぬ。」

「お言葉ではございますが、昨日捕らえられた者どもが皆白状いたしました。

新羅の法師行心こうしんが『皇子は大王の器であられる。久しく臣下の席にあっては身を滅ぼされるだろう』と申しましたそうですな。」

「あれは行心が勝手に言ったことだ。俺は信じてはおらぬ。」

「皇子は大王が亡くなられる前に、ひそかに東国に下られました。皆は東国で挙兵の準備をなされたのだと申しております。」

「あれは日の大神に参詣して大王のご回復を祈ってきたのだ。姉上にお会いしたかったのもある。」

大津の姉おおく大伯皇女は、齋王として伊勢にいる。かつて壬申の役の時、東国に脱出した父大王が、伊勢の日の大神に祈願して勝利して以来、未婚の皇女が齋王となって大神に仕えている。

「それならなぜ黙って行かれたのです。そのような言い訳おおききを太后様がお信じなさるとお思いですか。」

麻呂の頬に皮肉な笑みが浮かんだ。大津も笑った。この一言で大津はこの事件の本質を悟ったのだ。

「信じるわけがないな。太后にとって俺は邪魔者ではない。」  
そうだ。謀反の事実などどうでも良いのだ。草壁の即位を望む菟野にとって衆望を集める大津は邪魔な存在でしかなかったのだ。大津は逃れられない運命を悟った。

「唐には李下に冠を正さずという諺があるそうです。このような時に東国へ行かれたのがそもそもその間違いでございましたな。」

その頃、大宮を馬に乗って飛び出した舎人が一人。馬に鞭むちを当てると、山田の道を真っ直ぐ他田へ向かう。

ヒヒイーン

阿倍寺の前を猛烈な勢いで左に折れた途端、馬が棒立ちになって舎人は放り出されてしまった。馬が駆け抜けた後、のっそりと立ち上がったのは、大きな黒牛。

「おい。どうした。怪我はないか。」

声をかけたのは頬に傷の若者。心なしか頬の傷が笑っているようにも見える。舎人は呻き声を上げるばかりで返事にならない。

「背中を打ったな。動けないのか」

思いの他、優しいところがあるらしい。肩を貸して舎人を起こしてやる。

「痛、た、た、た。」

舎人の悲鳴。

「骨でも折ったかな。寺へ行って誰か呼んで来てやろう。」

「い、いや。その前に、これを、他田の、大津皇子様の、宮にいる物部、麻呂様に、お渡し、して、くれ、大急ぎだ。」

舎人は喘ぎながら懐の木簡もっかんを手渡した。

「まさか。何かの間違いです。」

山辺皇女やまへのひめみちは走った。袴の裾が絡まって転んだ。靴が脱げた。起き上がるとそ

のまま裸足で走った。足から血が流れ、金の簪かんざしが落ちた。山辺の後姿を見送って、簪を拾ったのは、先程の頬に傷のある若者。無表情に簪を懐に入ると、ゆっくりと山辺の後を追う。懐の中で簪と木簡が音を立てている。

大津の宮の周りには兵士が群がっていた。門に駆け寄った山辺は屈強な兵士に行く手をさえぎられた。

「無礼な。手を放しなさい。」

「ここはどなたもお通しできません。」

「皇子の妻じゃ。通しなさい。」

必死の気迫に兵士がたじろいだすきに、すかさず身をかわして山辺は門を通り抜けた。

大津は大殿にいた。張り詰めた空気の中で、凜としたその姿はかえって痛々しい。山辺の胸が締め付けられるように痛んだ。

「皇子様。」

「山辺か。」

髪を振り乱して駆け寄る山辺の姿に、初めて大津の眼に涙が浮かんだ。すぐりつく山辺の暖かい胸の鼓動が伝わって、突き上げるような悲しみが涙となって溢れ出る。

「山辺。俺は太后に嫌われた。もう死なねばならぬ。そなたに咎とがめはあるま

い。俺の分も長生きしてくれ。」

「嫌です。壬申の乱でおじい様が流されてから、一族の者は皆散り散りになつてしまいました。今、皇子様に置いて行かれては、この先、生きてはおれませぬ。どうぞ、私も」一緒にさせて下さいませ。」

山辺の父も近江宮大王だが、母は近江朝の左大臣蘇我赤兄そがのあかえの娘である。

山辺の熱い涙で胸が一杯になって、大津は庭に眼を向けた。夕日を浴びて赤黒く染まった池の面に、寒々とした枯れ木が不気味に影を落としている。

黒く浮かんでいるのは身を寄せ合う番いの鴨つが。

「鴨を見るのもこれが最後か。」

ももつたふ磐余いはれの池に鳴く鴨かもを

今日のみ見てや雲隠りくもかくなむ

(416)

見納めみおさと思うと夕日に映えて金色に輝くあの鳥からすさえいとおしい。

山辺と眼が合った。

「一緒に行くか。」

「はい。」

山辺は大きくうなずいた。

大津は南の連山を望み見た。吉野の山はもう雪に覆われているだろう。あの山で浄御原宮大王は菟野と共に、それぞれ母の違う草壁、大津、高市、忍壁、川島、志貴の六人の皇子を分け隔てなく慈しもうと誓いを立てた。

「大后はあの時の誓いを破った。」

菟野は国のためではなく、自分のために草壁を大王に立てようとしている。そしてそのためには大津が邪魔なのだ。もう涙は出ない。大津は腹の底から湧き上がる怒りを抑えることができない。

「このままではすませぬ。」

昂然と向きを変えて菟野の宮殿の方角を睨み付けると、自ら首に紐を巻きつけた。

くずおれる大津に駆け寄った山辺は、その憤怒の形相の凄まじさに一瞬ひるんだ。が、次の瞬間、大津の怒りが山辺に乗り移った。

「お待ちあそばして。私もすぐに参ります。」

軽やかな領布がはらりと落ちた。

地の底の暗闇に押し込められた大津と山辺の怒りが、とぐろを巻いて燃え上がる。炎はやがて出口を求めてひたひたと忍び寄る。

びたっ。

・・・びたっ。

・・・びたっ。

男の心を焦がすのは、恋の炎か、怒りの炎か。

たわわに実った両の胸乳が弾むように揺れて、男の心に囁きかける。

「これか。この胸で大津の心をつかんだのか。」

白くつややかな乳房をつかむと、鞠のように豊かな弾力が伝わってくる。

「これか。これか。」

狂おしいような嫉妬にかられて掌に力を込める。乳房が熟れた桃のように色づいた。

「ああっ。」

女は小さく呻いて身をのけぞらせた。裾が開いて白い脚がのぞく。

「この脚で大津の腰を締めたのか。」

邪険に両の脚を押し開くと、燭台の灯を近づけて、叢を覗き込む。

「ああっ。いや。」

熱さに身をよじって悶える腰をぐいっと押さえつけて、叢の中へ手を突っ込む。かたくなに閉じて男を拒む脚の感触が、男心を高ぶらせる。乾いた叢の中で締め付けられた指に生温かい息吹が伝わって来る。そろりと指を動かすとぴくりと腰が動く。そろり。ぴくり。そろり。ぴくり。

「ああっ。」

女はいよいよやをするように首を振る。息遣いが少しずつ荒くなる。そろり。

ぴくり。そろり。ぴくり。乾いた叢がぬるりとする。脚から力が抜けた。

「これでもか。これでもか。」

獣のような衝動に駆られて、叢の奥深くぐちゃぐちゃにかき回す。

「ああああ。」

大名児の体が反り返って、ぴくぴくっと波のように繰り返し繰り返し、指を締め付ける。やがて潮が引くように体中の力が抜けた。叢はぬるぬるになった。

「こやつ。男なら誰でもいいのか。」

草壁は衣を脱ぎ捨てると大名児の上に覆い被さって気が狂ったように叢を突き立てた。叢は草壁を吸い込んで、締め付けたり緩めたりしながらまつわりついてくる。余りの心地よさに草壁の頭は真っ白になった。

我に返って大名児から離れようとして、草壁はぎよっとした。大名児の叢が草壁を吸い込んで離さないのだ。引けば引くほど締め付けがきつくなる。草壁は焦った。

「離せ。大名児。離すんだ。」

大名児は答えない。草壁の顔から血の気が引いた。大名児の叢が氷のように冷たいのだ。いや、叢だけではない。脚も。腹も。胸も。そして、顔も。

「んん。か。お。」

大名児はこんな顔だったか。

「うわああああ。」

もう一度見直して草壁は悲鳴を上げた。山辺だ。首にくっきり残った紐の跡が痛々しい。怒りと悲しみをたたえた眼がじっと草壁を見据えている。叢に繋がれた草壁は逃げようにも逃げられない。壁が歪む。床が波打つ。燭台が倒れて灯が消えた。ごうごうと生臭い風が吹き抜ける。

「ほほほほ。」

山辺の歪んだ顔から乾いた笑い声が漏れると、冷たい腕がすうつと伸びて、草壁の震える体を捉える。草壁は心の臓まで凍りつきそうになる。

「俺じゃないんだ。助けてくれ。な。頼む。この通りだ。助けてくれ。俺は何も知らなかったんだ。」

「はははは。」

地の底から湧き上がる低い声。あれは大津だ。

「そうさ。お前じゃない。お前は大名児を横取りしただけさ。お前みたいな弱虫に俺が殺されてたまるものか。」

草壁は耳を覆う。

「わかつているのなら許してくれ。大名児のことは謝る。俺が悪かった。だから助けてくれ。」

「そうはいかぬ。大后が俺を殺したのはお前を大王にするためだ。何もかもお前のせいなのだ。」

「お前を殺したのが母上なら母上に崇ればよいではないか。」

亡霊は一瞬ひるんだ。

「悔しいが、あの女、俺を見て睨みおった。子を思う親心が亡霊なんかにかけてたまるかだと。あの強さは叔父上譲りだな。父上もお手上げたものな……。だから、あの女に勝つためにはお前に死んでもらうしかないというわけだ。さあ。怒りの炎の熱さを思い知れ。」

「ぎゃあああ。」

草壁の体が炎に包まれた。

「助けてくれえ。」

「皇子様。皇子様。如何なされました。お気を確かになされませ。」

遠くで誰かが呼んでいる。

「助けてくれえ。」

我と我が声で目が覚めた。体が重い。地の底に引きずり込まれそうになるのを必死にこらえて眼を開けた。阿閉の不安げな顔が覗き込んでいる。

「また夢をご覧になったのですか。」

草壁はぐっしより汗をかいている。

「まあ、ひどい熱。」

阿閉の手を振り払って、草壁は喘いだ。

「もう嫌だ。俺はまだ死にたくはない。大王になんぞなるものか。そんなに

大王の位が良いのなら母上が大王になればよい。俺は真つ平だ。」

「ええ、ええ。それがよろしゅうございます。お気の済むようにあそばしませ。私からも大后様に申し上げましょう。」

阿閉はあやすように夫の背を撫で続ける。このような時、阿閉はひとつ年上の叔母の顔になる。

「皇子様はご病気でございます。大王になればお命に障ります。皇子様をお助け下さいませ。」

阿閉の必死の懇願は、菟野を責めているようにも聞こえた。誰もが大津を殺したのは菟野だと思っている。阿閉もそう思っているようだ。だが菟野は言い訳はしない。

「考えておきましょう。」

独りになると椅子に体を預けて、深い溜め息をついた。菟野の使いは間に合わなかった。だがあの時菟野は殺すと言ったのだ。だから大津の霊が竜となつて現われた時も胸を張って退けることができたのだ。疾しいところがあれば、竜に飲み込まれていたことだろう。

だが、大津に死んでほしいと思つていたのは事実である。菟野の本心を見透かすかのように、大津を殺したのは誰だろう。実際に動いたのは物部麻呂と聞いている。だがあの無骨者は菟野の命には忠実に従うが、自分から相手の心中を推し量つて行動することなどできる器ではない。誰だろう。菟野には想像も付かない。誰かはわからないが菟野の心の中を察して動いてくれる人間がいることは、浄御原宮大王という後ろ盾を失った菟野にとっては、有り難い事である。

大王が崩御したというのに、草壁は何時までたつても即位しない。もはや草壁の病気は隠しようがない。巷では大津の怨霊のせいだと噂している。当然、次の日嗣が取り沙汰される。佐留としては、若い頃から出入りしている大江皇女の二人の息子、中でも勝気で文武に優れる弟の弓削に期待するところが大きい。こんな歌を贈ったこともある。

雲くも隠り雁鳴く時は

秋山の黄葉もみぢ片待つ時は過ぐれど (1703)

歌人である佐留は、歌の指南役として、宮廷歌壇に名を連ねている。歌人といえども宮中に身をおく限り、佐留もまた政治的に動かざるを得ない。

弓削の弟の舍人皇子とねりのみこにも歌を贈った。

冬ふゆも春はるべを恋ひて植えし木の

実になる時を片待つわれぞ (1705)

もつとも、大津の事件もある。気の弱い舎人は佐留の期待に乗ってはこない。